

す。業界団体もあれば、社員参加・奉仕型の団体、特定の国や地域が対象の団体もあります。そういう中で現在の協会の運営内容は社員のための社団法人としての安定した形だと思っています。それは中国を主テーマとし、その他の領域も含めた講演会・フォーラムを毎月いくつも開催し、広報誌を発行し、会員のための囲碁・書道・俳句・謡曲など歴史の長いサークルをもち、会員親睦の会合や旅行を催す—こういう形で存在し得るのは会館あればこそなのですが、今の協会はその活動を維持・充実させることで存在意義を十分果たしているものと考えます。

振り返ると私は過去数十年間、協会で数多くの楽しい方々、魅力ある方々と出

会うことができました。また知識を加える場や賑やかな集まりなどに数多く参加してきました。自分にとって貴重な経験でしたし、それが社団法人に属することのメリットだと思います。今回は協会が過去行った事業を振り返って見たわけですが、私は実際に協会が果たしてきた大きな業績の一つは、数多くの会員の出会いの場、交流の場、研鑽の場を提供してきたことであつたと思います。それは今に続いているのです。

皆さんどうか今後とも交流の場を広げて下さいますように。そして「和」の気持ちによって協会活動を盛り立てて下さいますようお願い申し上げます。

関西地区会員より

当協会が発行する「善隣」誌は、第何号という呼び方に「No」(ナンバー)と「通巻」の2つの数え方がある。前者は、42年前の1977年7月に「第1号」が発行され、「善隣」と名付けられてから2019年2月号で500号を数えることになった。因みに、後者は、それより以前に「国際善隣倶楽部会報」とか「善

隣月報」という名前で発行されていた時代があり、それらを含めると通算で第何号という言い方をしている(『国際善隣協会70年のあゆみ』)。

今般、この500号で地方会員の声をぜひ載せようという機運が盛り上がり、「関西地区」会員にお願いをしたところ5名の会員から寄稿をもらうことができ

た。テーマは「自由に書いてください」とお願いし、原稿の到着した順番で掲載をさせていただくこととした。

(事務局長 藤沼弘一)

引揚二世

滋賀県立琵琶湖博物館・館長

篠原 徹〈滋賀県近江八幡市〉



引揚二世という言葉がどのくらい定着しているのか知らないが、社会的に認知されているとは思えない。「善隣」を知るキッカケになったのは、引揚という戦後の社会現象に強い関心をもつ研究者とたまたま知り合いであつたからである。

戦前に満洲や朝鮮半島あるいは樺太などにいた日本人の生活や社会については多くの資料や記録が残っている。けれども彼らが日本に帰還してからどのように日本社会で生活し再適応していったのかという記録も資料もきわめて少ない。これを日本の現代史として残す必要があるというのがこの研究者の主張であった。彼はその後私の自分史を含んだ『引揚者の戦後』（島村恭則編著、新曜社、2013年）を編んだが、それが「善隣」のメンバーのひとりの目にとまり入会を勧められた。引揚二世にとっては引揚げ後の生活は愚かな戦争の負の遺産とは言えない側面がある。自らの生を全否定するわけにはいかない。私にとって引揚げは所与であり、人生の始まりだからである。

私はそれこそ偽満洲国の官吏の息子で、父を尊敬しつつも侵略については激しい議論をしたこともあるが、私自身が日本社会の根っこにある日本的なものになじめず違和感をもっていた。この原因がどうやら父母の満洲経験と関係がありそうだと思い始めている。そうだとすれば他の引揚二世がどのような戦後を生きてきたのか関心をもちるのは当然であり、自らの思想や人生観を相対化できるかもしれないと「善隣」に期待したわけである。

過去30回以上の中国旅行で感じたこと

福澤紀久夫〈岡山市〉



在職していた旭通信社（現アサツー・ディ・ケイ）の上層部は、創業者の稲垣正夫会長はじめ満洲におられた方々が多く、私が国際善隣協会に入会したのも、石原健一最高顧問の勧めであった。広告会社では中国に進出したのは当社が最初で、当然、旭通信社内は中国への関心度が高く、当時としては、珍しい中国西域シルクロード展を1986年に日本各地で展開していった。

岡山市立オリエンツ美術館の会場で出

会ったのが北京出身の就実大学留学生の譚蘭さんだった。その夏、私たち夫婦は北京、西安、上海と案内をしてもらった。カルチャーショックを受けながらも、中国大好き人間になったのである。過去30回以上の中国各地の旅はすべて観光である。まず最初の旅の時は、初日が停電、馬車が走っている、道端でスイカや野菜が売られている、床屋もある、買物には友誼商店しかない。店員は無愛想で、人民服の人たちが所在なく昼日中たむろしている。仕事がないのだ。「共産主義の国だもの」と笑っているだけではないのか。人間は本来、意欲もあり「能動的」なはずだ。何か私たちができることはないか。おこがましい言い方だと今は思っているが、国がきちんと「人民」の心を掴む政策をとっていないと思った。蛇足だが、その後譚蘭さんの甥、潘軍、潘耀兄弟の岡山滞在中の身元保証人は私が引き受けた。兄弟仲がよく、帰国後、今では立派な商売人になっている。

1978年、政権は大きく舵を切った。鄧小平が深圳から徐々に改革開放政策を執っていた。「うわっ、こんなに人も物もあらゆることが変わっていくのか」と中国を訪れるたびに衝撃を受けた。高速道路などのインフラ整備、新空

港やマンション、ビジネスビル群の建設、物品や食料の豊富さ、人や車の活発さなど。日中間には諸問題が横たわっている。中国はまだ民主主義国家とは言えない。しかし、今や米中大国2強が覇権争いをしながら世界を動かしつつある。遅れをとることなく、日本も世界で存在感を示せるよう本気で未来を議論する時であろう。「国民」が希望を失わないためにも……。

満州の思い出

四塚 勝〈兵庫県西宮市〉



私は昭和8年3月大阪府高槻町（現高槻市）に生まれ、昭和12年7月に奉天市

鉄西区に移住、21年6月23日まで居住（その間、区内で2回転居）、引揚時は、瀋陽第二中学校鉄西分校の二年生でした（鉄西分校は、鉄西から本校への通学が危険になったために20年秋に開設されたものです）。引揚先は父の故郷の富山県で、私にとっては全くの異文化社会でした。第一、上下水道がありませんでした。今に至るまで「内地」に対するあの種の違和感は完全には消えていませんし、引揚60周年記念集会で司会の方の「ここに集まったものは皆親戚です」との趣旨のご発言に会場から沸き上がったよめきと拍手は、私が持っている「違和感」「孤独感」が私一人だけのものではないらしいと悟らせてくれました。

日本の満州支配が国際的に厳しい目で批判されていることは今から見れば当然で、我々も甘受しなければなりません。また、在満の日本人の生活水準が現地の人たちの犠牲の上に保たれていたことも否定のしようがありません。しかし、在満日本人の生活実態を実体験から語れるのは我々の世代が最後です。例えば、有名な唱歌「ペチカ」のペチカ（満州の多くの日本人家屋にあった暖房機、ロシアの本式のペチカとは異なる）がわかるのは我々だけです。

個々の会員が筆をとるのは多くの会員にとって荷が重すぎでしょうし、善隣協会が直接に満州の過去に過度に関与されることも問題かとは思いますが。しかるべき研究者あるいはインタビューとの対話あるいは座談の機会などを設けて話をうまく引き出していただくことができれば、と思います。各在満国民学校や中学校、女学校、実業学校の同窓会などの機会を利用しての関連研究者による取材も一案かもしれません。

若い世代の参加を望めないか

吉村良夫〈大阪府寝屋川市〉



半年前の入院中に不眠が続いた間、遠い思い出が何度も浮かんできた。屋根のない貨車に詰め込まれ港まで向かう沿線の野次と投石。引き揚げの船底の床をぬけ出してふるさとを偲び歌った夜も、満州を追われ日本に帰るまで赤痢と栄養失調だけで助かる。

こうしたことは全く忘れて仕事に追われていたころ、それを通じて知り合った人が引揚者だと偶然わかった後で「自分も」と話したことから、私は国際善隣協会に入会を誘われたのだった。その後は毎月送られてくる広報誌を見るたび、やや複雑な気分になることが多い。

大阪住まいが長く、定年後は上京することもめったにないため、協会主催の公開講演をまだ聞いたことがない。しかし毎月の誌面で見ていると、講師の迫力をじかに感じたかっとなと思う講演が少なくない。記録を読みながら、日中関連のさまざまな分野から見識の確かな人々を選んで招く担当者の努力は実に有難いと感じている。

大阪でも毎年1回開かれる関西地区懇談会に、できるだけ多くの参加があるとよいのだが。また引揚者世代より若い人々に、すぐ入会とまでは望めなくても、懇談会で交流できるようなイベント

の試みがあってもよいのではないかと感じている。

過去に遡ると…

田中忠仁〈大阪府箕面市〉



私は、過去のことを思い出すと、やはり昭和20年の終戦前後のことが一番忘れ難い。それは、8回にわたる「大阪大空襲」で大阪が壊滅したことだ。大阪川口居留地は木造家屋や脆い鉄橋の多い所で油脂焼夷弾が投下され、第1回の3月13〜14日の空襲によりほとんどが全滅した。川口基督教会は6月7日の第3次大空襲により被爆し、礼拝堂の一部が焼失した。江戸堀の日本基督教団大阪教会は

風向きにより奇跡的に戦火を免れた。私は大阪市福島区の西成線と阪神電車の交差する国道2号線側の防空壕から、あたかも天神橋の大火火のような照明弾と焼夷弾の光線が、川口居留地の方向に流れていくのを眺めていた。当時私は福島小学校2年生であった。空襲警報が鳴ると、父母が姉や幼少の弟、妹を連れて、先に防空壕に向かっており、最後の戸締りや火の用心は長男の私の役目と決まっていた。私は、丸石自転車の工場の前で照明弾に当たらないように、ガソリンスタンドと上福島消防署の裏の壁に身を隠して、走って国道を横切り防空壕に飛び込むのだ。これらは忘れられない想い出であり、今でもつい昨日のこのように思える。長じて、私は三菱商事に就職し、中国担当となり、1972年の日中国交回復後、大連に駐在し、旧満州各地の市場調査を行ったりした。また北京事務所副所長時代（81年〜83年）には、大連事務所、旅順出張所、瀋陽事務所の開設準備調査に携ったことなどが思い出される。天津事務所、南京事務所にも駐在した。国際善隣協会に縁の深い旧満州を駆け巡り、その後、国際善隣協会の会員になることとなった……。